

保育者養成における「表現」の学びを深めるための実践
— 幼児を対象とした音楽イベントを通して —

工 藤 千 晶

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第65号抜刷）

保育者養成における「表現」の学びを深めるための実践 — 幼児を対象とした音楽イベントを通して —

Practice to Promote the Learning of "Expression" in Nursery Teacher Training Course:
Through a Music Event for Preschool Children

工藤千晶

キーワード：保育者養成，表現，劇，楽器演奏

1. はじめに

幼児教育における領域「表現」の位置づけ 『保育所保育指針解説』、『幼稚園教育要領解説』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』に示されている領域「表現」の「ねらい及び内容」において、特に音楽分野と関わりのある記述として、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」（厚生労働省，2018，p.274／文部科学省，2018，p.240／内閣府・文部科学省・厚生労働省，2018，p.294）があげられる。そこでは、「大切なことは、正しい発音や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、子ども¹自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである」（同上）と説明が加えられている。そのため、幼児教育の現場においては「必要に応じて様々な歌や曲が聴ける場、簡単な楽器が自由に使える場などを設けて、音楽に親しみ楽しめるような環境を工夫すること」（同上）²が必要であり、さらに保育士や教師など、「大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、子ども³が音楽に親しむようになる上で、重要な経験である」（同上）と示されている。ここで求められているのは、「想像を巡らし、感じたことを表現し合い、表現を工夫してつくり上げる楽しさを味わうことができる」（同上）ように子どもを支援することである。

以上から、保育者養成課程における「表現」に関する学びのうち、特に音楽分野において学生に養うべきものは、ピアノや歌唱といった音楽的な技能、また音楽理論などの知識にとどまらず、それらを活かし、豊かな「表現」を創造し、子どもとともにそれを実践していく力であるといえる。

先行研究の検討 このような見解は、既に先行研究においても示されている。例えば、中島（2018）は、保育者養成課程においては音楽を多角的に捉える力を育成することが重要であり、単に楽器演奏の技術が優れている、歌を上手く歌うことができる、音楽理論に精通しているというだけでは、子どもに対して一方通行的な指導になりかねないと指摘している（中島，2018，p.163）。

ここで着目したいのは、保育者として豊かな「表現」活動を実践する力を養うための活動のひとつとして、学生による幼児に向けたコンサートの取り組みが注目されていることである。保育者養成課程に在籍する学生による、幼児を対象としたコンサートの成果を報告したものとすると、長崎（2017・2018）や浦田・山口・平野（2016）などがあげられる。

まず、長崎（2017）は、乳幼児に向けたコンサートに参加した学生へのアンケート⁴の結果をもとに、乳幼児に向けたコンサートが保育者を目指す学生の実践的な学びの場として有効であると述べている。さら

に、長崎（2018）は、乳幼児に向けたコンサートに出演した学生の学びについて、アンケートをもとに検討を加えている。そこでは、コンサートの準備や出演を通して学んだこと、および出演経験が今後の実習や保育者になった際に役立つと思うかといった質問がなされている。

次に、浦田・山口・平野（2016）は、音楽ボランティアの活動として、施設や幼稚園などで学生が行ったクリスマスコンサートなどの取り組みを報告している。その際、参加した学生に「保育者になって役立つと思うこと」などの質問が記載されたアンケート調査を行い、その傾向を示している。

本稿の目的 以上、幼児教育現場における領域「表現」の位置づけ、および先行研究の検討を通して、①保育者養成課程では特定の音楽的知識や技術にとどまらず、豊かな「表現」活動を展開する力の育成が求められていること、②その学びのひとつとして、学生による幼児を対象としたコンサートへの取り組みが着目されていること、そして、③各保育者養成校が独自にその取り組みを行っていることを確認した。

以上を背景として、本稿では「表現」の学びを深めるための実践として、保育者養成課程に在籍する学生を中心に行った5歳児・6歳児を対象とした音楽イベントを取りあげ、どのような点が領域「表現」の学びを深めることにつながったのかを報告する。

2. 音楽イベントの概要

音楽イベントは、5歳児・6歳児とその保護者を対象とし、4年生10名を中心に企画・運営がなされた。その他、補助として3年生10名がスタッフとして参加した。

音楽イベントのプログラムは、（1）劇と（2）楽器演奏の2部構成とした。

プログラム（1）劇 劇のストーリーについては、『保育所保育指針解説』、『幼稚園教育要領解説』、『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領解説』に示されている「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」（厚生労働省、2018、p.235／

文部科学省、2018、p.200／内閣府・文部科学省・厚生労働省、2018、p.265）という記述に着目し、本学が立地する津山地域の吉井川とごんご伝説をモチーフに、「けんたとはなのごんご大冒険」と題するオリジナルの物語を学生が作成した。ごんごとは河童を指す。津山市は、毎年ごんご祭りが開催されるなど、ごんごにゆかりのある地域である。まず、学生は津山地域で傳承されてきた吉井川とごんご伝説について調査し、劇を通して子どもに伝える内容を検討した。そこで着目したのは、ごんごは人間を川に引きずり込もうとするという傳承であり、このことをふまえ「川に子どもだけで遊びに行かないようにしよう」というメッセージを込め、ストーリーを作成した。登場人物は、5歳の男の子とその妹、父親、母親、祖父、祖母、ごんごとした。

学生は、幼児が楽しめる劇となることを前提に、川に子どもだけで行ったら危ない、というメッセージをどのように伝えるか、ストーリーやセリフの言い方、表情、動きなどについて話し合いを重ねた。

また、音楽表現としては、どのような場面でのどのような音楽を鳴らすのか、効果音を試行錯誤しながら作成した。さらに、子どもが楽しめるように、ダンスも考案した⁵。

プログラム（2）楽器演奏 このプログラムは、『保育所保育指針解説』、『幼稚園教育要領解説』、『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領解説』に示されている「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」（厚生労働省、2018、p.274／文部科学省、2018、p.240／内閣府・文部科学省・厚生労働省、2018、p.294）に着目し、普段馴染みのない管楽器にふれることで、幼児の音楽的な興味・関心をひくことを目的として考案したものである。楽器は、フルート、チューバ、トランペット、クラリネットを用いて、「やまのおんがくか」を演奏した。

まず、導入として「やまのおんがくか」を学生が幼児とともに歌い、その後、小鳥がフルート、ゾウがチューバ、ライオンがトランペット、シマウマがクラ

リネットを吹く、という歌詞に変更したものを学生が歌ってみせた。その際、歌とともに実際に楽器を鳴らした。

このように、歌とともに管楽器に親しんだ後、それぞれの楽器の簡単な説明やそれに関するクイズなどを取り入れた。それぞれの楽器の奏者は担当する動物のお面をかぶるなどの工夫もした⁶。

以上が、4年生を中心に行った音楽イベントの概要である。次に、音楽イベントのどのような点が「表現」を深める学びにつながったのか、学生へのアンケートをもとに整理する。

3. アンケートの結果

アンケートは、音楽イベントの企画、運営の中心を担った4年生10名に実施し、質問に対して自由記述(無記名)で回答する形とした⁷。

質問1 音楽イベントを通して保育者になる上で成長したと思う点 この質問に対する学生の回答は、次の3点に整理できる。

①幼児の前で「表現」することへの慣れ

まず、「人前で話すことで場馴れした」「幼児の前で歌ったり踊ったりして前にでること」「恥ずかしがらない点」「堂々と話すこと」「幼児の前で何かをすることに少し慣れた」「恥ずかしがらずに、思い切って役になりきるといふ点」「子どもの前に立つのが恥ずかしくなくなった」「大きい声を出すことが恥ずかしくなくなった」「幼児の前で演奏する機会はなかなかないので、その経験ができて成長したと思う」といった記述に着目する。これらは、幼児の前で「表現」するという経験そのものが、保育者になる上で成長したと思う点として記されているものである。

アンケートに回答した4年生は、保育実習において現場を経験しているが、幼児の前で実際に「表現」することに関しては、経験が不足していると感じていた学生が多いこと、またその不足をこのような音楽イベントを通して補うことができたと感じていることが読み取れる。

②「表現」への理解の深まり

次に、「歌を歌う際に、どのくらいの大ききで歌うか、笑顔でいるかを考えることができた点」「役になりきることができた点」「劇をする上で、観客に伝えるセリフの言い方、見せ方の理解が深まった点」「踊りを簡単に作り直せる力がついた」といった回答に着目する。

これらは、歌唱、演技方、ダンスの創作といった「表現」の技術に関する記述である。これまで学生は、「音楽Ⅰ(器楽)」「音楽Ⅱ(器楽)」「音楽Ⅲ(声楽)」「保育内容表現」などの科目において、歌唱や器楽、および幼児の「表現」活動について学んできた。そこで得た学びを基に、幼児に向けた「表現」を学生自身が実際に検討し、実践したことで、「表現」への理解が深まったと考えられる。

③幼児への理解の深まり

さらに、「子どもたちのことを考えて取り組んだこと」「幼児が楽しめるように考える力」「子どもとの関わり方」「(子どもの発言に対する)対応力」「子どもがどうしたら喜ぶのか」「将来子どもと劇をする際に、子どもが悩んだ時に一緒に考えたり、この音楽イベントで得た経験を活かしながら子どもに教えることができる」といった記述もみられた。

これまで、学生は保育実習などで実際に子どもと関わる機会を得ている。また、幼児の発達段階については授業などで学んでいる。この音楽イベントは、それらの学びを応用する場になったと捉えることができる。

④その他

その他の意見として、「導入の仕方」「劇が始まる前の時間も子どもが退屈にならないような配慮が考えられた」といったプログラム外の時間における子どもとの接し方について、あるいは「計画性をもって前から練習や制作をしたこと」といった準備に関すること、さらに「保護者や子どもが十分にふれあい、楽しめる環境づくりの大切さ」など、保護者との関りに関する記述もみられた。

質問2 音楽イベントで工夫した点 この質問に対す

る回答は、「劇」「楽器演奏」および企画全体に共通するものに分類できる。

・劇

まず、「劇」の工夫について述べている記述を整理すると、以下の項目に分けられる。

①言葉遣いについて

「子どもに分かりやすい言葉遣いを考えた」

②ストーリーについて

「(子どもだけで川に行かないようにしようというメッセージは伝えたいが) 怖すぎるストーリーにならないようにした」

③効果音について

「場面にあった音を探した」

④演技方について

「子どもにわかりやすく、大きな声で話した」「動作を大きくした」「子どもに感情が伝わりやすいように演技した」「劇では役になりきり、大きな動きや声、表情に注意し、子どもが見て分かるようにした」「自分の動きに注意し、子どもが集中してのめり込めるように動きにくせをなくすようにした」「セリフの速さや声色について、子どもに伝わりやすいように、また劇の場面に合うように意識した」

このように、言葉遣い、ストーリー、効果音、演技方など、「表現」に関する具体的な工夫点があげられている。すなわち、「表現」について多様な視点から試行錯誤したことが見て取れる。

・楽器演奏

次に、「楽器演奏」の工夫を述べている回答は、以下のように整理できる。

①幼児の関心をひくための工夫

「管楽器の魅力が伝わるように、また音楽的関心が高められるように、子どもの近くで吹いたり歌ったりしたこと」

②幼児への配慮

「歌詞を書いた紙をあまり動かさないようにした」「子どもたちに楽器が見やすいように、楽譜は少し低めに持った」「子どもの表情を見ながら演奏した」

③「表現」について

「演奏する時に速くなりすぎないようにした」

・企画全体

企画全体に共通する意見としては、雰囲気づくりに関する工夫を述べているものが大部分を占めている。例えば、「笑顔を忘れずに接した」「(今からやる活動が) 楽しくなるように、また期待がもてるように言葉運びに気をつけた」「親子の様子を見て、声のトーンを変えてみた」「楽しく歌える雰囲気をつくった」「本番では劇の前から子どもに楽しんでもらえるように音楽を流したり、話しかけたりして、楽しく安心できる場づくりを心掛けた」といったものがあげられる。

質問3 音楽イベントは、5歳児・6歳児という年齢の子どもたちに適したものであったか この質問に対して、10名中10名が「はい」と回答している。さらに、このように考えた理由について、自由記述の形式で回答を得ている。ここでは、そこで得られた回答を「劇」と「楽器演奏」および企画全体に共通するものに分けて整理する。

・劇

まず、劇を演じながら子どもの様子を観察し、5歳児・6歳児に適していたと判断している記述に着目する。その例として、「(ごんごの)「足をひっぱってやる」のセリフの後に子どもから声があがっていて、内容が伝わっていたので良かった」「子どもたちがくいついて見ていたので、興味をひきつけられていたと思う」「ごんごの踊りを一緒に踊ることができていたから」といった記述があげられる。

次に、劇の内容に着目し、5歳児・6歳児に適していたと判断している記述をあげる。例えば、「内容も怖すぎず、難しすぎなかったのも、ちょうど良かった」「劇の内容もあまりしつこくなく、最後に子どもたちに感想を聞いた際にもすらすら答えるなど、きちんと内容が伝わっていると感じた」「ごんごの怖さを伝えるのに、怖がらせずに伝えることができる年齢だと考えた」「この劇の内容が理解できる年齢だと思ったから」などがあげられる。

・楽器演奏

劇と同様、まず、子どもの反応を観察し、5歳児・6歳児に適していたと判断している記述として、「曲も子どもが知っていて、ノッてくれていたから」「積極的に楽器の名前が子どもたちから出たりしていたから」などがあげられる。

次に、楽器演奏の内容が5歳児・6歳児に適していたと判断している記述として、「フルート、クラリネット、トランペット、チューバなど、普段あまり見ることのない楽器は、5歳児・6歳児にとって新しい刺激になり、名前も覚えることでさらに関心が高まったと思う」「小学校への学びにつながったと思う」「歌もみんな知っている曲だったので歌いやすかったと思う」「(5歳児・6歳児よりも)低い年齢だと、音が怖かったり、楽器を触って落ち着かなかったり、字が読めない場合もあると思った」「やまのおんがくかの歌詞を見て歌うこと、クイズ形式など、5歳・6歳向きだと思った」「楽器の名前や動物の名前をすぐに覚えていたから」などがあげられる。

・企画全体

なお、企画全体に共通する意見としては、「とても楽しそうにして笑顔を見せてくれたから」「みんな歌っていて楽しそうだった」「子どもたちから「楽しかった」や「おもしろかった」の声があがっていた」といった回答がみられた。

以上、質問3を通して確認されたのは、学生が劇や楽器演奏を実践する際に、子どもの反応を自然に観察できていたことである。学生は、子どもの発達について学んだことを生かしプログラムを考案したが、それが子どもに適したものであったかどうか、子どもの反応から読み取っている。このように、子どもたちの前で実践し、その様子を観察することによって、自らの取り組みが子どもに適切なものであったかをフィードバックしているという点で、この音楽イベントは、「表現」の学びを深めることにつながったと考えられる。

質問4 反省点 この音楽イベントに関する反省点についての自由記述では、劇および楽器演奏ともに、ストーリーや自らの動きに関する細かな点が反省点とし

てあげられている。

・劇

まず、劇の反省点は以下の3点に分類できる。

①ストーリー

「ストーリーがもう少し怖くても良かったかもしれない」「ごんごに会ってみたいという声を聞いたので、もう少し怖くても良かった」

②演者の動き

「出番でない時に、隠れている場所が低いと思った」「けんたとはな(主人公二人)が倒れた時に、河童が荷物を拾うのではなく、他の人が拾ったらスムーズに進んだ」

③演技

「セリフの言い方や表現などをもっと工夫すればより伝わりやすくなり、楽しんでもらえると思った」

・楽器演奏

楽器演奏の反省としては、学生が歌詞を持って動く際の動き方が適切ではなかったことを指摘するものが大部分を占めていた。例えば、「楽器と歌詞を持って子どもの周りを回る際に、子どもが見るところに困っていた」「歌詞と楽器どっちを見たらいいか、子どもの目がうろろろしていた」「楽器を演奏する人と、歌詞を持っている人の位置が真反対の時があり、子どもの目線がきょろきょろしていた」「楽器が子どもの周りを回る時、歌詞とばらばらになっていたので、子どもたちがきょろきょろしていた。歌詞も一緒に回れば良かった」「楽器を持って回る時、子どもの目線がせわしく動いていたので、歌詞も楽器と一緒に回れば良かった」「楽器が親子の周りで演奏する際、歌詞が見えにくく、きょろきょろしていたので、歌詞を持つ人も一緒に回るか、楽器を演奏する人の横にいると良かった」「子どもの周りで演奏する際、歌詞と音の出る位置の違いがややこしかった」といった回答がみられた。

・企画全体

企画全体を通しての反省点としては、練習時間に関するもの、子どもへの声掛けに関するもの、上演までの待ち時間に関するもの、会場設営に関するものなど

がみられた。

質問5 この取り組みは、保育者になった際に活かせると思うか 質問5は、「そう思う・まあそう思う・あまりそう思わない・そう思わない」の4択とした。その結果、10名中9名が「そう思う」に回答、1名が「まあそう思う」に回答した。その理由については、自由記述で回答を得ている。結果は、以下のように整理できる。

①幼児への理解の深まり

「どのような配慮をすれば、子どもが興味をもってくれるのかが分かったので、配慮の仕方を活かすことができると思う」「どうしたら子どもたちが飽きないかなどが考えられた点」

②音楽的な興味・関心のひき方について

「楽器にふれることで音楽の幅も広がって良いと思った」「子どもに打楽器以外の楽器も知ってもらう機会はあまりないので、とても良い機会だと思った」

③発表会などの行事への応用

「楽器を使った劇は、発表会などでもできそうだった」「お楽しみ会などで劇をする場面もあると思うので、そこで活かせる」「音楽リズムや発表会で活かせるのではないかと思った」「企画する力がついた」「劇を実際に自分でやるという体験をしたことは、将来子どもと劇をする際に、どんな風に練習をしていくかなど、構成や予定をたてる時の参考になると思う」

④幼児とともに実践する「表現」活動への応用

「子どもたちと、どんな音がこの場面に合うか考えてやってみたら創造力も広がりそうだった」「子どもたちが楽しめる劇など、一緒にできるものが考えられると思った」「子どもの気持ちに寄りそうことや、子どもたちが協力して一丸となって何かを成功させる感動や達成感を味わってもらえるような教え方を考える時に役立つと思う」

⑤「表現」に関すること

「劇をする際にストーリーだけでなく、効果音、小道具も用意できる点」「踊りを簡単に考えることが出来る点」

このように、幼児の理解、幼児教育現場への応用、

「表現」の指導法など、多角的な視点から学生は自らの成長を捉えていることが読み取れる。

4. 総括

以上、今回の音楽イベントの成果として、第一に、子どもの発達に関する知識と「表現」に関する知識や技能を応用し、プログラムを考案していたこと、第二に、実際の子どもの反応を観察することを通して、自らの実践をフィードバックしていること、第三に、学生は多角的な視点から自らの成長を感じ取っていることがあげられる。

講義や演習、保育実習などを通して、子どもの発達について、あるいは子どもの興味・関心をひく指導法、さらに音楽的な知識や技術などを学んだ後に、これらの学びの応用として、この音楽イベントが機能していたと捉えられる。

注

- 1 「子ども」は、文部科学省（2018）では「幼児」、内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）では「園児」と記されている。
- 2 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）は、内容に相違はないが、若干、言い回しが異なる。
- 3 「子ども」は、文部科学省（2018）では「幼児」、内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）では「園児」と記されている。
- 4 長崎（2017）では、「子どもへの関わり方に対する気づき」「音楽に対する気づき」「保育者になった時に役立つと思うか」などの質問が設定されている。
- 5 この取り組みの詳細、例えばストーリー、配役、効果音、および子どもの反応や感想などは、赤堀（2020）で示されている。
- 6 この取り組みの詳細、例えば、作成した歌詞、説明の流れ、楽器の紹介やクイズの内容、および子どもの反応や子どもの感想などは、中木（2020）で示されている。
- 7 倫理的配慮として、自由意志による同意であること、同意しない場合でも不利益は受けないことをア

ンケートの表紙に明記した。

引用・参考文献

- ・赤堀彩織「幼児に津山の文化を伝えるための実践的研究－吉井川とごんご伝説を題材に－」美作大学卒業論文，2020。
- ・厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館，2018。
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館，2018。
- ・長崎結美「乳幼児のためのコンサートによる音楽教育の可能性（2）－保護者と学生を対象としたアンケート結果から－」『帯人大谷短期大学紀要』第54巻，2017，pp.33-42。
- ・長崎結美「乳幼児のためのコンサートによる音楽教育の可能性（3）－保育者養成の視点から－」『帯人大谷短期大学紀要』第55巻，2018，pp.35-43。
- ・内閣府，文部科学省，厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館，2018。
- ・中島龍一「五領域「表現」における感性豊かな音楽的表現力のある学生を育成するための一考察－ピアノによる劇音楽の作曲書法あるいは演奏技法からのアプローチ－」『日本体育大学紀要』第47巻第2号，2018，pp.161-179。
- ・中木智絵「幼児の音楽的関心を高めるための実践的研究－管楽器を用いたコンサートの取り組みを通して－」美作大学卒業論文，2020。
- ・浦田真理子，山口真理，平野光佐登「幼児保育学科学生による音楽ボランティア体験－意識の変容と表現力の向上に着目して－」『松本短期大学研究紀要』第25巻，2016，pp.87-96。

